とある農家の一生

喜多 智明
福屋研究室

設計主旨

人生は限られた時間をどう生きていくのか
死ぬまでの時間の中で、どのように成長し老いていくのだろう
記憶の積み重ねが成長を感じ、やがて老いとなる

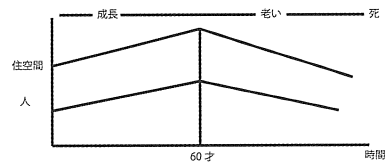
建築は記憶を繋ぎ止める。人が死を迎えるように建築もすたれ果てる。ある人の人生を考え、死に至るまでその人がどのような老いの形をしていくのかを考えた。
家に人が住まい、家がはじまる。そこで過ごし、成長し、結婚し、老いて、死を感じ、死へ向かう、人の一生を考えた。これはある人が過ごした人生を通じて、生きられた記憶を積み重ね家と共に成長し老いていく家を考えた。

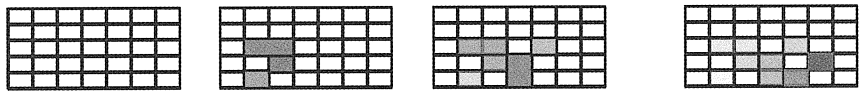
10
2013年度
建築学科
卒業研修
報告集
東北工業大学

敷地

敷地の登米市は古くから米の名産地として知られ
農業産出額は東北地方第二位なのに対し、人口の減少
、少子高齢化により農家の減少が近年続いている。
この付近の湖は東北地方最大の白鳥の飛来地でもある。

人が成長すると同時に建物の使用空間大きくなり、人が老いに向かうと建物の使用空間も小さくなると考えた。
住人がその時その時の時代、家族、趣味に合わせて自ら増築していくセルフビルドを提案する。
減築はせずに記憶として残し、人も建築も衰退していく。
いずれ住人が死を迎えたとき、ここは住人の人生の歩みを表した墓のような物になる





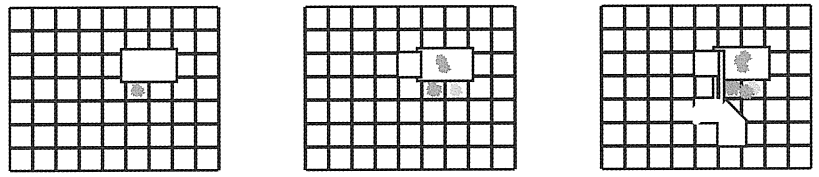
人生に死という終わりがある
その中でどう生きるか

生活の変化によって作る家
も変わっていく

時間の経過で建築も老いて
いく

人生が終わるとき建築も
終わる

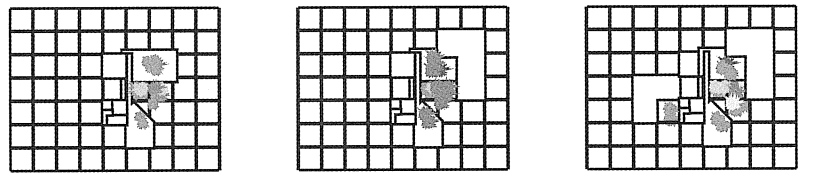
菜園の変化



リビング、寝室から見える
位置で菜園をはじめる

2階の寝室から見えるよう
屋上菜園をはじめる

中庭のようなかたちになる



月日と共に植物も成長する

屋上菜園とリビングが繋がったり
緑が増える

息子の家の前に植物を植える

最後の家の正面の中庭でゆっくり
過ごしながら植物を育てる

人の手入れがされなくなり、菜園も終わる

年表

22才 セルフビルドスタート

24才 寝室、物置をつくる

28才 結婚

30才 第一子誕生 長男

32才 第二子誕生 長女

36才 長男の子供部屋をつくる

37才 長女の子供部屋をつくる

42才 家族の家をつくる

50才 長男成人

54才 息子の家をつくる
長女家出る

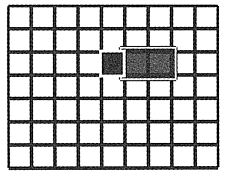
63才 嫁他界

65才 最後に過ごす家をつくる

建物の変化

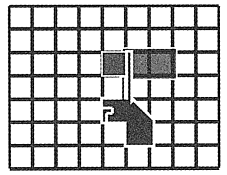
南側に大きな開口をとる
一人暮らしに必要最低限の
面積と機能をもたせる

一人暮らし用のスペース



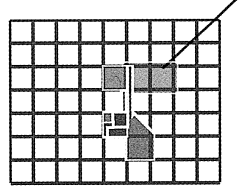
1階に農作業用の倉庫
一つ前の建物の屋上に
上がれるようにした

装色のいい場所で寝たくなり、2階
に寝室をつくる



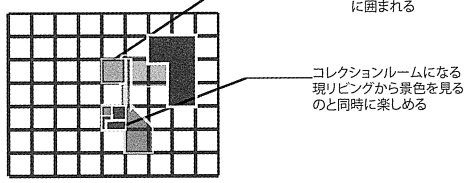
前の建物を眺められる配置
GLから1500上げ屋上菜園と
中庭の同時に見えるように
した
増築の可能性を残すために
屋上に上がるようにした

結婚し夫婦で過ごせる部屋をつくる



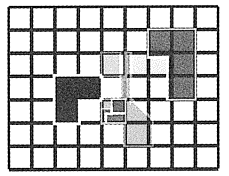
屋上の子供部屋は即席の
ため小さい

二人目の子供ができ、その子の部屋もつくる



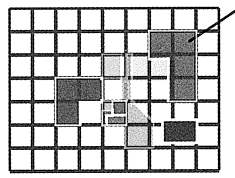
家族で一つの建物に過ごす
ため全ての機能を一つの
建物にまとめた
以前までの建物を抱え込む
イメージで配置し、リビング
から屋上菜園に直結する形
をとった

子供も成長し、みんなで過ごせる大きな家をつくる

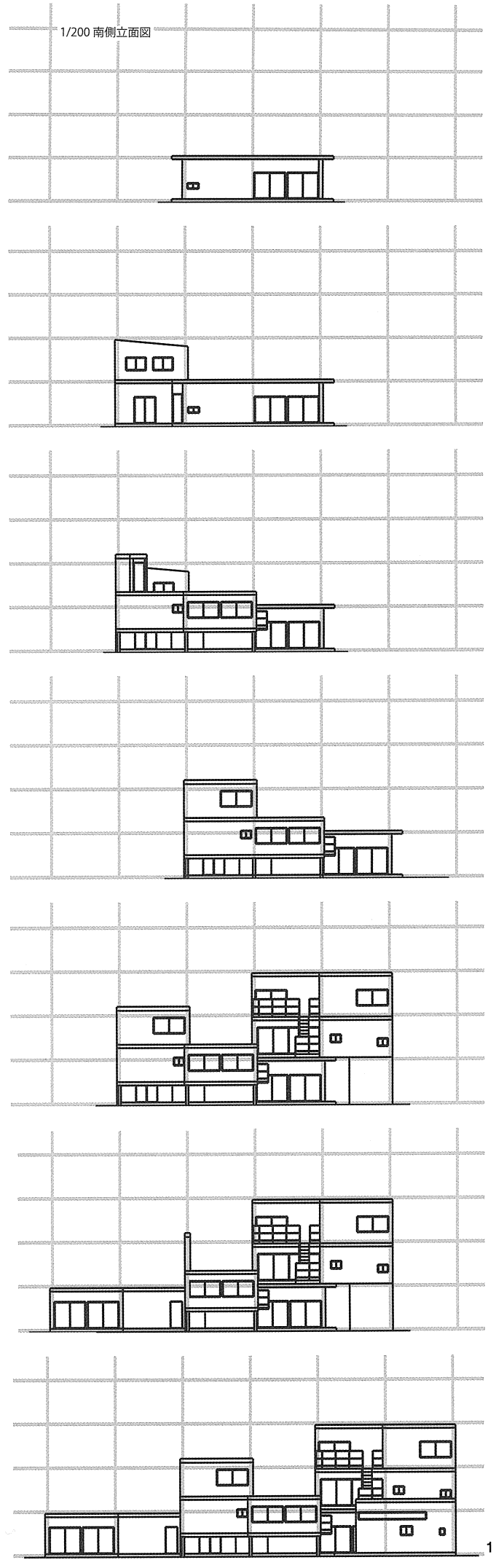


農作業の中心が息子に
移るため、農作業道具が
ある倉庫から近くに配置
した
ある程度時間を過ごせる
ように大きめに作った

息子が自立し、敷地内に息子の家をつくる



最後の家は今までの建物
を全て見渡せるように配置
し、年もとったので、最小限
の面積と機能をもたせた

嫁が他界し死を考え最後に過ごす家をつくる

1/200 南側立面図